viewpoint 66
THE SAISON FOUNDATION
セゾン文化財団ニュースレター第66号
2014年2月25日発行
http://www.saison.or.jp
公益財団法人セゾン文化財団
The Saison Foundation Newsletter — 25 February, 2014

追悼
堤 清二 理事長

読売新聞提供

1987年、私財で当財団を創立し、爾来26年余に亘って理事長を務めて参りました堤清二が、昨年11月25日、逝去いたしました。享年86歳でした。

堤には、セゾングループを生み育てた事業家としての顔と、辻井喬の名で数多くの詩や小説を創作した文筆家としての顔のほかに、もうひとつ、社会に貢献するフィランソロピストとしての顔がありました。

いっさいの見返りを求めず、芸術家やその活動を支援する当財団の活動は、フィランソロピスト・堤清二の思いを具現化したものであり、われわれは、今後も永くその意志を継承していきたいと思います。

本号は、理事長の追悼号として、当財団ゆかりの皆様に、それぞれの想い出を寄稿していただきました。

公益財団法人セゾン文化財団
常務理事 片山 正夫

堤 清二 関連年譜

1927年　3月30日　東京・三鷹に生まれる
1951年　(学)国立学園理事長に就任
1954年　(株)西武百貨店入社
1955年　辻井喬として最初の詩集『不確かな朝』を刊行
1961年　西武百貨店池袋店にて「パウル・クレー展」を開催
1962年　東京都港区高輪に高輪美術館開館
1971年　フランス共和国より〈レジオン・ドヌール勲章(シュヴァリエ)〉受章
1973年　渋谷パルコ開店、同時に西武劇場[現・パルコ劇場]開館
1975年　西武百貨店池袋店内にて「西武美術館」開館、また同店内にて書店「リブロ」、アート専門書・レコード店「アール・ヴィヴァン」開業
1979年　西武百貨店池袋店にて「池袋コミュニティ・カレッジ」開設、同店にて「スタジオ200」開館
1981年　高輪美術館が軽井沢に移転し、現代美術を対象とする美術館として開館
　　(株)ファミリーマート設立
1983年　(株)西友が「無印良品」直営1号店を青山に開店[現在(株)良品計画が経営]
　　(株)西武クレジット[現・(株)クレディセゾン]が「セゾンカード」を本格的に発行
　　六本木WAVE開店(同店内に映画館「シネ・ヴィヴァン」開館)
　　ニューヨークのアジアン・カルチュラル・カウンシル(ACC)に対してセゾングループから200万米ドルを寄附
1984年　有楽町西武開店、同店内にて「有楽町アート・フォーラム」開館
　　西武百貨店池袋店にて「西武アート・フォーラム」開館
1985年　「西武流通グループ」から「西武セゾングループ」へ改称
1986年　(財)高輪美術館[現・一般財団法人セゾン現代美術館]設立
　　西武百貨店渋谷店にて「シードホール」開館
1987年　銀座セゾン劇場開館
　　私財を基金として(財)セゾン文化財団設立、理事長に就任
　　フランス共和国より〈レジオン・ドヌール勲章(オフィシェ)〉受章
1988年　八ヶ岳高原音楽堂開館
1989年　池袋にセゾン美術館開館
　　オーストリア共和国より〈功労勲章大金章〉受章
1990年　「西武セゾングループ」から「セゾングループ」へ改称
1991年　セゾングループ代表から引退表明
　　軽井沢の「高輪美術館」が「セゾン現代美術館」へ改称
1993年　モスクワ大学より名誉博士号を受ける
1994年　セゾン文化財団「森下スタジオ」開館
1998年　『消費社会批判』により中央大学より経済学博士号を受ける
2003年　セゾン文化財団、企業メセナ協議会よりメセナ大賞2003〈舞台芸術牽引賞〉を受賞
2007年　辻井喬として芸術院会員に選ばれる
2009年　セゾン文化財団、〈ドナルド・キーン日本文化振興賞〉を受賞
2012年　皇居宮殿にて行われる「歌会始の儀」にて召人(めしうど)を務める
　　アジアン・カルチュラル・カウンシル(ACC)より〈ブランシェット・H・ロックフェラー賞〉を受賞
　　辻井喬として文化功労者顕彰
2013年　11月25日　逝去

自宅書斎にて

viewpoint 66号 目次［追悼 堤清二理事長］

堤さんの「いいんじゃない」 天児牛大……004

堤清二さんを偲んで 一柳 慧……004

応答 岡田利規……005

告白すれば 川村 毅……005

光を与え続ける偉人 北村明子……006

前衛と慈愛が交差し堤清二が逝く。
セゾン文化の夢を孕んだ昭和という時代が逝く。 紀国憲一……006

辻井喬の思い出 ドナルド・キーン……007

烽火は消えない 小池一子……008

濁りのない常識人として 小池博史……008

かけがえのない人 高橋昌也……009

「綱渡り」という倫理 高山 明……009

堤さん 勅使川原三郎……010

堤さんの思い出 平田オリザ……010

文化のフィランソロピスト 福原義春……011

矜恃としての支援活動 宮沢章夫……012

ありがとうございました。 八木忠栄……013

表現者としての経営者を悼む 山崎正和……013

堤清二さんへの追悼 リチャード・ラニエ……014

＊追悼文の掲載はご執筆者の五十音順とさせていただきました（敬称略）。

堤さんの「いいんじゃない」

天児牛大
AMAGATSU Ushio
山海塾主宰

堤さんに初めてお会いしたのは、作家の武田百合子さんに誘われて、昼食をともにさせて頂いたときでした。たまに私の海外での活動を聞かれる以外は、お二人は、執筆やお互いの本のことなどを楽しそうに話しておられ、なんとなく私はその場にふさわしくないような心もちでいたのを覚えています。その時の会話は、堤清二さんというより辻井喬さんだったように思えます。常に柔和で、笑顔を絶やさず、静かに話されていらっしゃいましたので。

その後、何かをお願いすることなく過ごしてきましたが、セゾングループのある方から、銀座セゾン劇場で山海塾の公演をやりませんか、という提案を頂きました。提案を頂き、大変うれしかったです。東京の公演のみが自分たちで劇場を借りて行う自主公演であったため、どこかの劇場がプロデュースしてくれることを待ち望んでいましたから。ところが、事情はあまりよくわかりませんでしたが、なかなか公演の決定に至らず、フランスへの渡航前日に、ようやく公演が決まったという連絡がきました。最終的に、堤さんが「山海塾、いいんじゃない?」とおっしゃったことが決め手になったと聞きました。

その後、劇場へは、極力チケット代を安く抑えてほしいこと、そしてパリ市立劇場との新作の共同製作のお願いなど、わがままなお願いをしてきたわけですが、担当の方がその都度やはり堤さんに伺っていたようです。そのような経緯を知ったのも後からですが。

いま考えると、企業メセナそのものであったように思えてなりません。常にかげから、「あ、いいんじゃない」という声が聞こえてくるような気がいたします。89年から10年以上も、企業メセナとして公演をプロデュースして下さったことは大変ありがたく、それ以降も、東京では成し得ないことです。直接お願いしての成立ではなく、常にかげながら支援して下すったことに、心から感謝とお礼を申し上げます。

最後にお会いできたのは、国立能楽堂での日本舞踊の会でした。立ち話でしたが、相変わらず柔和な微笑みで話されていたのが忘れられません。

1989年9月八ヶ岳高原音楽祭にて。右から谷川俊太郎氏、大岡信氏、堤清二(辻井喬)、武満徹氏。
撮影:週刊読売 平田一八

堤清二さんを偲んで

一柳 慧
ICHIYANAGI Toshi
作曲家・ピアニスト
公益財団法人神奈川芸術文化財団芸術総監督、セゾン文化財団評議員

私は改めて、日本はかけがえのない国際的な人を失ったという思いを痛切に感じている。それは堤さんが、多くの事に秀でていたからにほかならないが、それだけではない。そのスケールの大きさと、人格の高さが群を抜いていたからだと私は思っている。堤さんとは二度、外国人が大勢いる中でいっしょに過ごした事がある。一回はロンドンのロイヤル・アカデミーで、私のグループがコンサートを行った後、あちらの人達と会食した時。もう一回は東京で、アジアン・カルチュラル・カウンシル(ACC)主催の堤さんのブランシェット・H.ロックフェラー賞受賞記念パーティの時である。どちらの場所に於いても、出席したイギリス人や、アメリカ人達の振舞いによって、彼らが本当に、堤さんを尊敬し、敬意を表していることが、ひしひしと感じられる雰囲気が漲っていた。

よく何か起こると、人命を大切に、と言われるが、私は同時に、人格がいかに大事であるかを、これ程如実に目の当たりにしたのは初めてであった。その佇まいは、堤さんが力を尽くして運営されていたセゾン文化財団の芸術家への支援の在り方にも明白に表れていたと言えるだろう。実際、堤さんとセゾン文化財団の支援なくしては、最近の日本の演劇界と舞踊界の今日のような活性化した状況は生まれえなかったであろう。それは日本でよく見かける有名人を対象に、広告による見返りを前提としたスポンサーではなく、まだ無名に近い、これからどう育つか定かでない若い個人やグループの中から才能を見出し、長期にわたる援助を行うというわが国では珍しいパトロン的性格に徹した運営がなされているからである。

芸術上の新しい提案に対しても、つねに寛大であった。私は1970年代に、当時池袋の西武デパート12階にあった西武美術館で、ミュージック・イン・ミュージアムという現代音楽の催しを提案させていただいた。美術館で音楽を行うという事にもすぐに関心を持って下さり、紀国取締役らのバックアップもあって、催しは恒例化し、他の美術館やギャラリーなどにも浸透していった。そして2001年にはオペラの脚本まで書いていただいた。それは辻井喬として、すでに多くの優れた詩や小説を発表していらしたからであるが、何よりも、1940年代という時代や社会状況に精通していらした辻井さんを除いては、考えられなかったことによる。音楽を意識した言葉づくりや構成を考えて書かねばならぬ脚本は、オペラの脚本書きという職業が存在しないわが国では、苦労される方が多いが、なんと辻井さんは、3ヶ月という驚くべき速さで、内容の濃い、音楽的時間もぴったりの長さの脚本を書き下して下さった。この杉原千畝を主人公にしたグランド・オペラ『愛の白夜』は、これまでに4回上演されているが、この仕事をごいっしょ出来たことは、私にとって生涯忘れることのできない思い出となって、心に刻み込まれたものになっている。合掌。

応答

岡田利規
OKADA Toshiki
演劇作家・小説家・チェルフィッチュ主宰

堤清二さんに僕はたった二度だけだが、お会いすることができたからほんとうによかった。

まず2007年か08年、東京で初めてお目にかかった。年末に催されるのが恒例のセゾン文化財団の助成対象者などの集まる懇親会の場でのことだった。二度めは、中国・韓国・日本の文学者が集まった東アジア文学フォーラムという催しが2010年に北九州で開かれた際、ホテルから会場までの移動のバスに乗り合わせたときだった。

どちらの機会もごく短く言葉を交わしただけだったし、実は何を話したのだったかも今となってはおぼえていないのだけれど、そのときの会話が年長者であり舞台芸術のフィランソロピストである人と若輩者でありその年長者からの助成を受けている一人の舞台演出家といった関係に規定されたような感じとは全然無縁の雰囲気のなかで交わされたものだったということだけは忘れられようもない。

あのとき会話をしていた二者の関係は、同じ時代を生きる者どうし、ただしこの時代についての異なった立ち位置、異なった捉え方をもつ一人の作り手どうしとしてのそれだった。言った内容や僕への態度がちっとも偉ぶったものじゃなかったとかそういうことだけでなく、堤さんのまとっているオーラじたいが、凛としてはいるのだけど、こちらが気圧されるようなそれではまったくなかったのである。反対に、威圧するようなことをこの人は僕に対して絶対にしないだろうということが実に明瞭に感じ取れた。だから緊張しないで済んだ。気さくに話をさせていただいた。そして、この人は助成アーティストの一人としての僕に対して、たとえばこれこれこういったアーティストになってもらえたら嬉しい、というようなリクエストをなにも押しつけてこない人なのだとわかった。それで僕はかえって、これは応えなければいけないぞ、という気持ちになったものだ。応える、といっても堤清二氏に対してではない。もっと大きくて広がりを持ったもの、社会とか、世界といったものに対して応える責務を、勝手に感じたのだ。

僕は演劇の作り手としての自分の仕事を、社会――これは公共とも言い換えてもいい、観客と言い換えてもいい――にできるだけ強くはたらきかけるような芝居をつくることであると考えている。そういうのがいささか堅苦しい考え方だということ、もうちょっとルースに考えたっていい、芸術たるものむしろルースなくらいじゃなきゃ、ということは承知のうえで、いまのところは生真面目に考えてみている。しかし遠くない将来に、そうした生真面目な応答の仕方を超えた先にあるルースさに、辿り着く予定でいる。

堤清二さん、それについては期待してもらって構いませんので。

告白すれば

川村　毅
KAWAMURA Takeshi
劇作家・T factory主宰

このことをご本人には話せなかった。

1987年、27歳だった私はトッド・ブラウニングのカルト・ムーヴィーを80年代に蘇らせようと換骨奪胎の戯曲『フリークス』を書き下ろした。内容はこんなふうだ。

東京のハイブリッド百貨店グループがミラノから人気ファッション・デザイナーを招聘し、ショーを開く。デザイナーの名前はアントニオ・サレルノ・パゾリーニ。幕が開くとモデルは全員フリークスで、ファッション・ショーは囂々（ごうごう）たる世評の非難を浴びる。担当する社員は騒ぎを収束するために東奔西走するが、パゾリーニを呼んだ張本人のグループの社長・西城は平然としている。西城はどうやらショーの中身をあらかじめ知っていて、密かにデザイナーとの共犯を企んでいたようだ。

この社長像に堤清二氏が重ね合わされていることは明白だ。私は当時直接ご本人と面識はなかったが、1960年前後生まれである私達の世代の誰もが口にする通り、堤氏が牽引したパルコ、セゾン文化の影響は、80年代、カルチャーに関わる若者にとっては絶大で、その実像と虚像への愛を表明したのが、この劇だった。

さらに劇の後半、西城とパゾリーニは、経営者とアーティストとして役割を分離させた共犯者どうしという関係に留まらず、ほとんど実は同一人物であったかのような様相を露呈させる。西城／堤氏という公式が、西城／パゾリーニと化学反応を起こし、パゾリーニ／西城／堤氏へと発展する。確かにすでに冒頭の独白でパゾリーニはエリュアール詩集について言及している。これを堤氏へのめくばせと呼ばなくてなんであろうか。

堤清二という時代のカリスマが、西城とパゾリーニという二体の登場人物によって表象される光景を、27歳の私はいかなる他意もなく描こうとしていた。しかもこの劇は当時パルコとの提携公演としてパルコ・パート3で上演されたのだった。これは悪ふざけでも悪戯でもない。敬愛を根拠にさせた批評であり、堤氏という謎の探求だった。

90年代に入って以後、私はセゾン文化財団から有形無形の助成をいただくことになる。恒例の年末懇親パーティーで初めて堤氏本人と対面した。含羞（がんしゅう）の人だった。毎年、パーティー会場で氏をつかまえては一方的に話しをした。結局『フリークス』のことは話せず終いだった。

もっと話したかった。まだまだ聞きたいことがやまほどあった。

光を与え続ける偉人

北村明子
KITAMURA Akiko
振付家・ダンサー、信州大学人文学部准教授

長野県での公演当日に受けた訃報、“堤清二氏逝去”に、一瞬、別の時空に突き落とされたようなショックを受けた。学生時代から体験してきた文化的な出来事の多くが「セゾン文化」とのつながりを強く持ち、何よりもセゾン文化財団の芸術助成をいただくことで、直接的に偉大な恩恵を受けてきた。ショックの大きさは、意識的にも無意識的にも、堤氏の文化芸術創造における驚異的な貢献活動が、自らの体内にいかに深く浸透していることを物語った。

個人的な堤氏との大きな思い出の一つは、氏が詩人、作家である辻井喬氏として脚本を担当された、オペラ『愛の白夜』に、振付・出演の機会をいただいたことだ。舞台は第二次世界大戦下のリトアニア、ナチスの迫害から逃れるユダヤ人らにビザを発給し、多くの命を救った日本人外交官杉原千畝の史実に基づく創作作品である。

台本を開くと、ソリストと合唱のパート分けのある、台詞＝歌詞が眼に飛び込んできた。既に何度も書き直された形跡がある台本は、日本語の台詞のほとんど全てを歌にのせていく、ということの難しさを物語っていた。「愛と暴力」というテーマへのアプローチの数々が、人間のあらゆる精神の葛藤を綴っていた。絢爛豪華なオペラ、というイメージからは真逆の世界、不条理で残虐な戦争時代が物語の背景となるこの真剣勝負に、どんなダンスを展開したらよいか、正直に言えば最初はとまどっていた。

しかし歌と一体化した言葉を感覚で受け取っていくうちに、抗い難い欲求に導かれた運動へ、『愛の白夜』の世界へと駆り立てられていった。歌われるために厳選された言葉が、詩的に美しくも写実的に鋭くも心を打つ。ビザ取得に生死を翻弄されるユダヤ人たちの心情と、それを救うため、政治的立場の矛盾を抱えた人間の、誠意と愛を貫く強さが、否応なく身体に浸透してくるのだ。「オペラの台本を書くのは初めてです。聞いてわかる言葉を選ぶのに苦労しました。」と少しはにかむようにお話をされ、稽古場でも静かに思慮深く、アーティストたちにやさしく声をかけ、進行具合を見守られていた辻井氏の姿が今でも脳裏に焼き付いている。

日本の敗戦と復興を体験してきた辻井氏が、リトアニアでの現地リサーチを経て、未来への切実な思いを託した作品でもあったように思う。主人公の、過酷で不条理な時代にあっても希望を失わず、“与え続ける”行為を遂行した強い信念が、辻井氏ご自身の姿と重なる。どのような時代となろうとも「前進せよ」と背中を押してくれる光を与える存在であるように。

大いなる偉人の、安らかなお眠りを心よりお祈りいたします。

前衛と慈愛が交差し堤清二が逝く。
セゾン文化の夢を孕んだ昭和という時代が逝く。

紀国憲一
KINOKUNI Ken-ichi
元セゾン文化財団常務理事、元セゾン現代美術館常務理事・館長

「今は見るべきことは見果てつ」

西武百貨店で20数年同じ時を過ごし、セゾン文化財団を、パリのポンピドゥー・センターやNYのMoMAと並ぶ前衛的文化活動の拠点たらしめた堤清二さんが逝った。今はただアルバムをめくりながらともに仕事をした昔を思い返し、堤さんが好きだった「平家物語」に出てくる平知盛の言葉などに思いを馳せるのみである。

アルバムの中にコロンビア大学で講演する堤さんの姿がある。ドナルド・キーンさんの尽力とセゾン文化財団との共催で1996年に行われた「安部公房記念祭」における一枚である。この類まれな創作者の全貌を辿る催しでは、安部さん、キーンさんいずれとも深い親交のあった堤さんが、メイン・スピーカーとなったのだった。

堤さん、安部さんらと過ごす時間は刺戟的かつ気のおけないものだった。70年代から90年代にかけては、12月の末に「良支（よしき）」で河豚をつつくのが恒例になっていた。参加メンバーは堤さん、安部さんの二人と武満徹さん、新潮社で安部さんの担当だった新田敞さん。時にはキーンさんや一柳慧さんがお顔を出すこともあった。

創造性を無視したイミテーションの氾濫するキッチュな現実――堤さんの言葉を借りるなら「のっぺらぼうな経済闘争へのめりこんでいった日本」――を嘆きつつも、成熟した文化・社会への道を世に問い続ける姿勢。年の瀬の喧噪をよそに文学・芸術から思想・政治・世相にまで及んだ議論は、最先端をゆく創造者たちの「前衛」の姿を、さながらライブ・パフォーマンスのように眼前で体感させてくれた。昨年は、安部公房さんが亡くなってから二十年。山口果林さんの自伝をはじめ何冊かの関連書が刊行され、安部さんが再評価された。その年に堤さんも逝ってしまった。

北欧、パリ、それにカイロ。堤さんとは多くの機会をともにしてきた。ソビエト連邦では、過密な日程で政府機関のあるモスクワとエルミタージュ美術館のあるレニングラードを何度も往復したせいか、四十度近い高熱を出して倒れてしまったのだが、病室を訪れた堤さんは、私の顔を見るなり額に自分の額を直接押し当ててこう言った。

「紀国さん、明日いちばんで帰国しましょう」。

経営者、作家、メセナの体現者……。世間が堤さんを呼び表す言葉は数多い。静かだが熱のこもった口調で「前衛」を語る堤清二、いかに多忙であろうとも部下への慈愛を忘れない堤清二。

私が関わったのも、堤さんの持つ多面性のいくつかに過ぎないだろう。だが、ドナルド・キーンさんによれば「生」という文字には十六通りの読み方があるという。「辻井喬」としての営みも含め、円熟した複数の「生」を生きた堤さんは、それぞれの「生」と交わった人々に、それぞれ無二の真実を遺したに違いない。

辻井喬の思い出

ドナルド・キーン
Donald Lawrence KEENE
コロンビア大学名誉教授

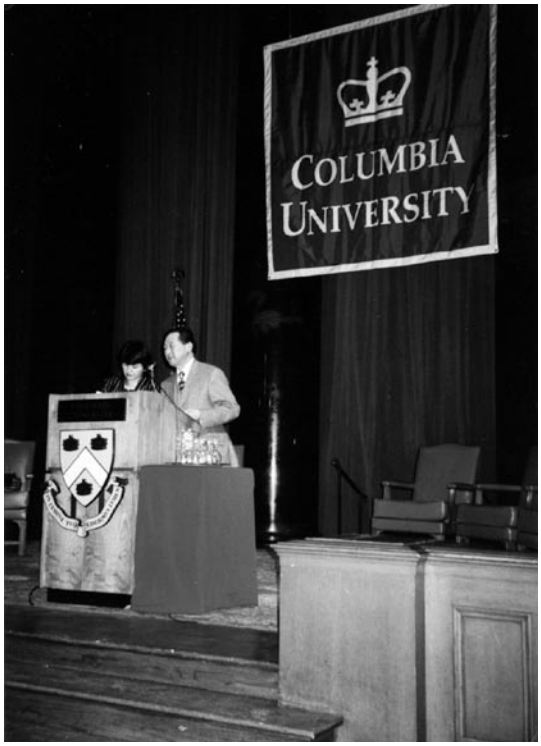
人はよく私の記憶力を誉めて下さいます。確かに何でもない過去の事件は良く覚えていますが、年月日となると全く頼りになりません。辻井喬(堤清二)の思い出を書こうとして、順序の誤りがありましたらそのためです。ご了承下さい。

辻井さんに初めてお目にかかった年をはっきり覚えていませんが、多分1950年代の終わり頃だったでしょう。場所は築地にある有名な料亭の新喜楽です。芥川賞の選考会で使われる場所でした。私が辻井さんに会った時には何の会だったか忘れましたが、辻井さんの席は私の席から相当離れていたために、言葉を交わす事もありませんでした。食事が終わって帰る間際に玄関で偶然に辻井さんと一緒になりました。お顔を新聞や雑誌の写真で存じていた私は、勇気を出して自己紹介しました。辻井さんは私の気持ちと同様に「ずっと昔から知っているような気がします。」と応えられたのです。

これは初対面の挨拶として異例でしょうが、理由がありました。それは私が数年前に日本に初めて来た時に親友になった永井道雄さんから、少年時代より面識のある辻井さんについて聞く機会が何回もあったからです。また永井さんも、京都の自分の住まいの直ぐ近くで日本文学を勉強しているアメリカ人の話を辻井さんにする機会が恐らくあったでしょう。そしてお互いに共鳴を起こす何かがあったと思います。

永井さんからは辻井さんが非常に優れた実業家であると聞いていました。私は実業家に会ったことがなかったので、単純に「金持ち」と解釈しましたが、優れた実業家がどんなものか初めて分かったのは池袋の西武百貨店の開店の時です。この建物が出来る前、池袋は決して東京の繁華街の中で面白味のある町ではありませんでしたが、辻井さんはそんな平凡な所に立派な百貨店を立てる天才の持ち主でした。お蔭で町の雰囲気全体が変わり、百貨店の中にも商品だけではなく幾つかの画廊が設けられ、美術館に負けない作品が陳列されていました。日本の古美術の部屋もあり、現代の陶器も色々ありました。百貨店が文化の中心になり、辻井さんの趣味のよさは、ある種、教育的でもありました。きっとよく売れるだろうと思いました。これらすべては実業家・堤清二と芸術家・辻井喬との共作だと分かりました。

当然の事ですが、私は堤さんより辻井さんに親しかったのです。辻井さんの詩歌と小説を読んで感心いたしました。ずっと後のことですが、私は谷崎賞の選考委員の一人として辻井さんの『虹の岬』のため一票を投じたこともあります。受賞された時には本当に喜びました。毎年の暮、辻井さんは作家や執筆者、そして芸術家の友人を集めてふぐの御馳走に招く習慣がありました。終戦直後、辻井さんと安部公房さんが一緒にこの伝統を始めたと安部さん自身から聞いたことがあります。料亭は渋谷の奥の目立たない路地にある古い木造の建物でした。小説家、画家、作曲家、評論家、哲学者、ジャーナリストなどの十数人が集まる会でそれは今も続いています。辻井さんはそれぞれの分野の新しい研究を熟知しておられ、誰とでも面白い話が出来ました。



1996年ニューヨークのコロンビア大学にて行われたドナルド・キーン・センター・オブ・ジャパニーズ・カルチャー主催「安部公房記念祭」にて。
提供:紀国憲一氏

辻井さんは古いお寺の建築に詳しい人でしたが、何よりも新しい芸術に魅力を感じる人でもありました。セゾン文化財団は新しい演劇、新しい舞踊をどこよりも援助しています。また、辻井さんは他の資産家のようにフランスの印象派の絵などを集めた美術館を建てようと思えば、建てられたのですが、軽井沢にあるセゾン現代美術館の美術品の殆どは現代的な作品です。

最後に私に対する辻井さんの親切について一言お話しさせて頂きたいのです。辻井さんはお歳暮の時だけではなく、何かお目出たいことがあれば必ず花かワインなどを送って下さいました。また、御本が発行されると翌日には届けて下さったものです。私はいつも深く感謝していましたが、最も感謝したのは頂いた品物ではありません。それは機知にあふれる暖かなお話でした。私が80歳になって文化功労者を頂いた際の祝賀会でも、あるいは、私の88歳の誕生日においても、辻井さんは素晴らしいお話をして下さったのです。その上、ニューヨーク・タイムズが私の仕事について記事を発表した時、辻井さんの評価が論評の中心となっていました。極めて忙しい、世界的な人物がどうして私にそれほど親切に接して、優遇して頂けたのかとても説明できません。私は十分、感謝しなかったと思いますが、辻井さんの親切と真心は永久に忘れることがないと確信しております。

烽火は消えない

小池一子
KOIKE Kazuko
クリエイティブ・ディレクター、セゾン文化財団評議員

1981年 8月1日、軽井沢にセゾン現代美術館がオープンし、その前夜の祝賀会の模様を堤さんは“現代芸術の烽火(のろし)祭”と形容されている(著書『叙情と闘争』)。

マルセル・デュシャンの「大ガラス」とジョン・ケージのデュシャン作品演奏という企画を東野芳明さんが企画され、集まった国内外のアーティスト、文化関係者にはきら星のような顔ぶれが見られた。きら星というのは日本のみならず世界各地の現役の表現者たちがそう私に見えたということであり、堤さんは各出席者とそれぞれの作品を熟知して招待されているのだが、のろしという言葉には堤さんのアートに関わるさまざまな思いがこめられていたと思う。

1975年に西武美術館が池袋西武に誕生し、堤さんはミッションとして「時代精神の証言」の場ということを掲げられた。キュレーターの歩みを始めたばかりの私は東野さんのアシスタント的な立場で企画展「見えることの構造」に参加し、宇佐美圭司、倉俣史朗などの画期的なヴィジュアル表現が立ち上がる現場に身を置くことになった。68年に初めてお会いして以来、現在ただ今の創作を合い言葉に交わさせていただいた会話や事柄の中にはアメリカ現代美術作品の情報収集もあり、ロサンジェルスの友人の画廊Riko Mizunoをご紹介したことからジャスパー・ジョーンズ作品等が西武美術館に収蔵されていった。

2013年秋に宇佐美圭司展(没後1年)がセゾン現代美術館で開かれ、軽井沢の紅葉はまだ少し早い時期ではあったけれども私は豊かな自然環境の中の館の内外を久しぶりに歩く機会に恵まれた。マン・レイ、カンディンスキー、シュヴィッタース、挙げればきりのない珠玉の傑作が館内に厳然としてあり、森村泰昌、アンゼルム・キーファーなど私自身の展覧会作りのプロセスにおいて堤さんにご相談してきた作家たちの表現の結晶もここに収められている。

どれほど曇りない目で作品と対峙なされるのか。作家の有名、無名は言うに及ばずあらゆる判断基準がその人・堤さんの中にしかないコレクションの存在がここにあるとあらためて思う。ジャンルを超えた視線の先には田中一光もロドチェンコも魯迅もいた。それら表現者の才能に普通の市民が触れられるようにするために水面下では想像を絶する“闘争”があったのだろうし、自伝にさりげなく書かれた出来事の記述の行間には目眩のするものがある。

見返りのない支援という言葉が日本ではメセナ活動を機に知られるようになったが、とっくにそれを実践されていたのが堤さんであり、かたちの残らない表現でもあるパフォーミングアートへの長期にわたる助成も堤さんならではのミッションということができる。

キーファーの「革命の女たち」は鉛のベッドが並ぶ作品で、そのインスタレーションを凝視した後に私は堤さんの病の重さをご家族から知らされた。

80年代にあげられた烽火は遺されたコレクションと著書の中でちろちろ燃え続けることだろう。

濁りのない常識人として

小池博史
KOIKE Hiroshi
演出家

堤清二さんにはじめてお会いしてから二十数年間、十数回程度面会しただけだったが、毎回感銘を受けた。特に2011年から12年にかけて、パパ・タラフマラ・ファイナルフェスティバルの名誉会長として立って頂いたときのあれこれは、人間はかくありたいものだと思わせてくれた方として鮮烈に私の中に染み付いている。

このフェスのときも、セゾン関係者はじめ、多くの方々に堤さんに名誉会長として立って頂きたいのだがどうだろうと相談すると、一様に言われたのは「堤さんは辻井喬の名前でならともかく、もう堤清二の名前で表に立つことはないだろう」とのこと。表舞台からこの名前では引退していたからである。しかしご自身からは、「喜んで引き受けます」との思いがけない回答があった。理由は明快で、3・11後にどのようにアーティストとして向かい合うかという覚悟が見え、かつ、この閉塞社会の中、次なる行動は芸術的思考と行動からしか出てこないからとのことだった。

私は小躍りしながら、堤さんにお会いし、対談を二度ばかりさせて頂いたのだが、ご高齢になられているにも関わらず、言葉は明瞭で、私のような若造の話ですらきちんとメモを取りながら聞く、その謙虚さに驚かされた。「経済活動と文化活動は全く折り合わない」「メセナ活動は実は好きではない」「日本人はみんなですぐに助け合ってしまう」……こう書くと嫌な人物のように感じられなくもないが、人の真髄を言い当てている言葉ばかり。「メセナが好きではない」との言葉も本物の芸術志向から来ており、助けるのが先にあるのではなく、本物でなければ、との意見。本物があまりに少ないとしみじみと嘆いておられた。批評家批判も辛辣だったし、舞台芸術分野はもとより、ご自身の詩の分野でも3・11後に書かれた詩の酷さを苛烈なまでに批判された。そして魯迅が書いた『阿Q正伝』の主人公である阿Qに触れた。小狡く、権力に弱い阿Q、それは自分自身のことだと考えながら書き綴った魯迅の姿勢こそが大事、と。この立場に立つから世界は見える、と。すなわち人間の根源にいかに立つかということ。

経済人でもあったが、私にはきわめて真っ当な芸術家、いや常識人に見えた。こんな常識人は今、ほぼこの現実社会から消えてしまって、いかに小賢しく生きるか、その方が成功者と見なされる時代のまっただ中に私たちは立つ。だからこそ、私は堤清二という素晴らしき常識人が去ってしまったことが悲しくてならない。

心よりご冥福をお祈りするとともに、私たち自身が堤さんの意思を継がねばならないと思う。それが堤さんの意思であろう。

かけがえのない人

高橋昌也
TAKAHASHI Masaya
俳優・演出家、セゾン文化財団評議員

堤さんは早くから現代美術の紹介に力をつくし、同時に現代音楽への関心も深く、その旗頭ともいうべき武満徹のこよなき理解者だった。また自ら経営する企業の宣伝に異色の才能を登用してその斬新さで時代をリードした。そして還暦を記念するかのように銀座に劇場をつくると共に現代舞台芸術の振興のための財団を設立した。劇場の柿落としには既成の概念を打破して高い評価を得ていたピーター・ブルックの作品をあて、引き続き彼の集大成ともいうべき『マハーバーラタ』の招聘を優先させるなど、堤さんのアートに対する姿勢は一貫して不変だった。

その一方で辻井喬としてあまたの秀作を残したが、それらはおしなべて潔癖な人柄と深い教養に紡ぎ出された格調高く典雅ともいうべきもので、およそ前衛とは程遠かったから、これを皮肉と呼ぶことも出来るだろうが、ものづくりの宿命とは得てしてそういうもので、保守も革新も関係なく、すぐれた作品はどのような体裁をとろうがすぐれているのだ。

私にとって堤・辻井という二つの稀有な才能を失ったことは無念という他ないし、実の兄弟を亡くしたよりも辛くて悲しい。

高橋昌也氏は本年1月16日にご逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。
（編集部）

安部公房氏と。

「綱渡り」という倫理

高山 明
TAKAYAMA Akira
Port B主宰・演出家

セゾン文化財団から助成をいただいていた関係で、懇親会で何度かお目にかかることはあったが、私が堤清二／辻井喬氏と直に向き合ったのは一度きりである。『国民投票プロジェクト』における対談をまとめた『はじまりの対話』という本を作った際にインタビューさせてもらったのだ。

堤／辻井氏に伺いたかったのは、どうして巣鴨プリズン跡地にサンシャインシティを作られたのかということだった。というのも、サンシャインシティのプロジェクトを推進した「新都市開発センター」の発起人は堤氏であり、経済界全体を巻き込んで巣鴨プリズンを移転させ、そこにサンシャイン60を建設させた張本人だったからである。私がなぜサンシャインシティに興味をもったかと言えば、60人の戦犯が処刑された巣鴨プリズンは戦争の「闇」が封じ込められた場所であり、そこに当時東洋一の高さを誇ったサンシャイン60が建てられたことは、あらゆる意味で日本の「戦後」を象徴する文字通りの徴ではないかと考えたからだ。堤氏の回答を詳しく述べる余裕はないが、なぜ60人が処刑された場所に60階建ての建物が建ったのかという問いには「それは偶然です」とお答えになった。そして「父親から反対されたからそこまでやってしまいましたが、それでも東條さんたちの戦犯としての責任は消せません。……それでどれだけの人が死んだのか。それはやはり許すことはできません。ただ街をよくするために移転させるということは、そういうことの価値判断とは関係ありません。」と続けられた。あの時の鋭い眼光を私は忘れることはないだろう。

あの発言に、あの時の眼光に、私は堤／辻井氏の生き様を見た気がした。戦後最大ともいえる闇を引き受けサンシャインに逆転させてしまうこと、それがプライベートな家族関係にもつながってしまうこと、そして何より自分の価値判断と事業を切り分けてしまうこと。しかも切り分けることで何かが解決するのではなく、もともと巨大だった矛盾がさらに深まるようなやり方で。闇をサンシャインに変えるのも、父親に挑むのも、同じ結果をもたらしたに違いない。堤清二と辻井喬という二つの名前についても、どちらか一方が本質的というのではなく、二つを切り分けるスラッシュに、二つが引き裂かれているその狭間に、唯一の居場所があったのではないか。あるいは氏にとっては居場所ですらなく、「いつも綱の上を歩いていた」（『死について』所収「綱渡り」より）その移動だけが全てだったのかも知れない。「地上よりその方が私には安全なのだ なるべく目的地を意識しないで進む」「ただ均衡を取ることに集中して」。巨大な矛盾を引き受け、「綱渡り」状態に身を置き続けるのが堤清二／辻井喬氏であり、均衡それ自体が凄まじい倫理だったように思えてならない。

堤さん

勅使川原三郎
TESHIGAWARA Saburo
ダンサー・振付家

堤さんには財団の代表者というお立場から様々な形で劇場公演や活動への援助などをいただきまして大変お世話になりました。しかし最も印象にあるのは、個人的な出会いを作っていただいた時のことです。

1990年代初めのある冬の午後、堤さんは私を神奈川県沖の軍艦島に誘ってくださいました。初対面の堤さんは静かな方で私も静かでした。無口の二人が、港から小さな舟に乗り冬の波に揺られていると突然鉄の塊が姿をあらわした。上陸し大きな傾きを登りつめて頂上の狭い先端部に着くと、堤さんは詩を詠みはじめ私は踊った。強風に吹き飛ばされそうな私の身体を堤さんの声が引き戻しました。それはNHKの番組になったと思いますが、詩の内容もどのように踊ったかもよく覚えていません。しかし堤さんのおだやかな姿と行き帰りの舟の中の沈黙が私にとって確かな存在でした。舟が港に着き、お別れの挨拶を交わしました。「ありがとうございました。さようなら」。いま私は思います、あの時の挨拶は「別れ」ではなくて「分かれ」という意味の言葉だったのだと。ひとときを分かち合ったのちの「さようなら」だと私は思い起こせます。堤さんの様々な詩作やお仕事は、分かつという精神が根底に流れていたのではないでしょうか。

いまも私には堤さんのあの時の沈黙が聞こえるようです。無理に言葉を出さなかったつつしみとして。

ニューヨークで開催されたアジアン・カルチュラル・カウンシル（ACC）主催のイベントにて。
音楽家のラヴィ・シャンカール氏（左）とACCディレクター（当時）ラルフ・サミュエルソン氏と。
Photo: Masao Katayama

堤さんの思い出

平田オリザ
HIRATA Oriza
劇作家・演出家・青年団主宰、こまばアゴラ劇場支配人、
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授

私の父は、戦後間もない頃に旧制一高の学生寮の食料委員を務めていて、その関係で地元の農家と懇意になり、祖母の着物などを売ったなけなしの金を集めて小さな土地を譲ってもらい、そこにバラック同然の家を建てた。祖父を沖縄戦で失った父は、祖母や家族を養うために学校を辞め、その地に「ベラミ」という名の喫茶店を開いた。同じ土地にいまは、こまばアゴラ劇場が建っている。

某国大使館のパーティーで、不破哲三さんにお目にかかったときに、「あなたが平田の息子さんか。お宅の店を潰したのは私たちだ」と言われた。当時の「ベラミ」には共産党の「細胞」（東大にいた学生党員たちをかつてはそう呼んだ）たちが入り浸って長居をし、そのために経営が傾いたと言うのだ。そしてその中に若き堤清二さんもいたらしい。15年ほど前になるが、私と堤清二さんが初めて対談をすることになり、その楽屋に私は父を呼んだ。50数年ぶりの再会であった。なんだかお互いに照れくさそうだったが、共通の友人、知人の消息など話すうちに、遠い過去が甦ってきたようだった。

堤さんとはそれ以降も、様々な会合で対談をしたけれど、もっとも印象に残っているのはフランスのカンパニーと合同で創った『鳥の飛ぶ高さ』上演の際のアフタートークに来ていただいたときだった。作品の原作者、フランス最長老の劇作家であるミッシェル・ヴィナヴェールさんは、フランス・ジレットの元社長という異色の経歴を持つ。彼の代表作の一つ “Par-dessus bord” を翻案し、日仏合作で上演することが決まった時点で、日本上演のアフタートークは堤さんに是非お願いしたいと思っていた。単に経歴が似ているからというだけではなく、この戯曲自体が、外資の参入によって混乱していく同族会社の人間模様を描いた、いわば「経済戯曲」とも言える作品だったからだ。

さらに、あとから調べて分かったことなのだが、お二人はまったくの同年齢であった。洋の東西に別れつつ、同じ年頃に戦争を体験し、二十代で戦後民主主義を謳歌し、さらに作家と実業家の両立という困難を経験してきた二人が、82歳（当時）にして出会うことになったのだ。本番前の会食の時点から、お二人の会話はヒートアップして、話題は文字通り多岐に及んだ。ヴィナヴェールさんは、二十代後半でアルベール・カミュに才能を見いだされ交友もあったというほどの、フランス文学界の重鎮である。堤氏の文壇における交際範囲は、ここに記すまでもない。まさに日仏の現代文学の生き証人の二人が、三軒茶屋の小さなしゃぶしゃぶ屋で相まみえて、文学談義を交わすのである。特にフランス現代詩の話などになると、私はそこに出てくる詩人の名前の三分の一も理解できなかった。

阪大の仕事で、堤さんに司馬遼太郎と戦争について話を伺ったことなど、まだ書きたいことはいくらでもあるが、すでに注文の紙数を大きく超えている。私の父、堤さん、司馬さん、ヴィナヴェールさん、1920年代に生まれた人々に（その文学作品に）共通するのは、「生き残った者」という感覚だろう。本当は、そのことをもう少し考えてみたかったが、それはまた別の機会としたい。

文化のフィランソロピスト

福原義春
FUKUHARA Yoshiharu

株式会社資生堂 名誉会長
公益社団法人企業メセナ協議会会長

2005年9月、パリ日本文化会館にてピエール・カルダン氏と。

2009年6月、セゾン文化財団が「ドナルド・キーン日本文化振興賞」を受賞したときのスピーチにて。
撮影：桃井一至

若い頃から堤清二さんという存在に憧れを持っていた。かねてから高名の輝いていたその人の生き方、考え方を羨む所があったし、「歩く広告塔」と言われた言動には常に何かと影響されてもいた。兄弟のいない一人っ子だった私が、こんなことを思ったのは見当違いだったかも知れないが、ひそかに四歳年上の兄のように見立てていたこともあった。

そのうちに堤さんの事業は更に世の中の注目を集めるようになった。

西武百貨店の経営もそうだし、西武美術館の華々しい、しかも質的に高い活動もそうだし、アール・ヴィヴァンやリブロポートの発信していたさまざまな精神もそうだった。パルコや後にロフトもこの時代を作り上げた。それらの現象的な事柄よりも、経営から社会問題など全てのことを文化の立場から分析し、思考することに驚嘆して共感したのであった。

そうは言っても堤さんと私は、云わば月とスッポンのような落差があって、長いこと接点がなかった。

それが突然のように縮まる転機があった。朝日新聞とフランス文化省が共催する第三回日仏文化サミットのための準備会議に堤さんがどうしても出られなくなった。朝日新聞の伊藤牧夫専務から堤さんの代りに私に出るように電話がかかって来たのは1987年のことだ。伊藤さんはフランスに遊びに行くつもりで気楽に参加してくれという。「いくら何でも堤さんの代りには……」と尻込む私に、堤さんのパリ在住の妹である邦子さんが助けてくれると持ちかけられ、意を決してアルベール・カーン庭園の大温室での会議に出席した。それを堤邦子さんが後ろの席から見守ってくれた。その後の私の国際文化交流についての経験はこれがスタートとなった。

これ以後、日仏文化サミットでも、オプションの地方巡回でも堤さんとご一緒の機会が多くなった。

そして朝日新聞OBの根本長兵衛さんの骨折りで企業メセナ協議会の発足する時にも発起人としてご一緒に歩む機縁となり、次第に縁が深くなった。

いつの間にか二人の関係は一方で私が堤さんを畏敬し、もう一方では盟友のようになり、いくつものプロジェクトや文化活動に共に取り組んだ。

その一つの例がフランスの元文化外交官で作家、ジャーナリストであるフレデリック・マルテルの文化評論の二部作『超大国アメリカの文化力』『メインストリーム』の邦訳出版の計画だった。そのための出版助成に当たっては先陣を切って賛同して頂いた。文化の今日的な先端の思考を日本の社会に一刻も早く共有してもらわねばならないという共通認識によるものだった。

こうして堤さんと私は半世紀の間に先行者と追随者の立場から、共に文化フィランソロピーの実践者となった。

矜恃としての支援活動

宮沢章夫
MIYAZAWA Akio
遊園地再生事業団主宰、劇作家、演出家、小説家

これまでも、堤清二氏について発言する機会がたびたびあった。それらはほとんど八〇年代についての文化論、都市論という文脈だったが、そうした研究の専門家ではないので、多分に自分の個人史と平行して語ってきた。通過してきた道に、直接的に、あるいは間接的に堤清二氏が関わった「場所」がいくつもあった。

演劇という、私にとって九〇年代以降の仕事の中心になった分野で、堤清二氏とセゾン文化財団から受けた支援は、もっと直接的だ。

もちろん氏と面識があったわけではない。パーティで挨拶する姿をお見かけすることしかなかった。けれど、セゾン文化財団の支援にどれだけ助けられたかわからない。三年間にわたる「芸術創造活動プログラム」の助成を受けたのをはじめ、いまでも様々な相談に乗ってもらい森下スタジオを稽古やワークインプログレスなどでたびたび使った。それらは背中を押してもらうことだと感じていた。創作に向けて後押しをしてくれる。

上野千鶴子氏と堤氏(著者として「辻井喬」名でクレジットされているが)との対談をまとめた『ポスト消費社会のゆくえ』(文春新書)で上野千鶴子は、西武美術館が開館する際(1975)、堤氏が書いた「DECLARATION(宣言)」を取り上げ、その一部を、「この美術館は創造的な美意識の発現の場であり、絶えざる破壊的精神の表現の場である」と要約し、「この『宣言』の背後にあるのは、エスタブリッシュされたアートやハイカルチャーが、デッドストック化してしまっている従来の美術館に対する批評意識ですね」と語る。それに対して堤氏は、「西武美術館は美術というジャンルにこだわらず、時代のアクチュアルな表現、創作活動をどんどん紹介していく場所でなければならない。選ばれた価値の定まった美術品を壁に掛けておく、そういう仕事は美術館ではない、というラディカルな発想が運営の基本にあったと認識しております」と応接する。ここでは、美術館を「劇場」や「スタジオ」に、美術を「演劇」と置き換えても読むことができる。そこに堤清二がいる。「選ばれた価値の定まった美術品を壁に掛けておく」ようなことをしない人だ。経営者であると同時に、文学者でもあった氏の、個性的な美意識は、ある「特別な姿をした支援」となってあとからやってくる者に語りかけてくるように思えてならない。軽井沢にセゾン現代美術館がまだ存在し、そして、セゾン文化財団の支援がさまざまな形でいまでも続いているのは、堤清二氏にとって大きな誇りと生き方そのものだ。学生時代の政治運動から続く、制度への批評と抵抗する視点ではなかったかと想像する。

2001年6月、ニューヨークで再会したラ・ママ実験劇場創立者、エレン・スチュアート氏と。

2009年9月東京・森美術館のMAMアートコース講演「企業と文化の関係」にて。
撮影:御厨慎一郎

2012年10月、東京で開催されたブランシェット・H・ロックフェラー賞の授賞式にて、
ACC名誉会長のエリザベス・マコーマック氏から表彰状を受け取る堤清二。
撮影:吉村昌也

ありがとうございました。

八木忠栄
YAGI Chuei
元セゾン文化財団常務理事、詩人

1987年に、堤清二さんは私財を投じてセゾン文化財団を設立した。さかのぼれば1973年以降、セゾングループは劇場、美術館、音楽堂、多目的ホール、映画館などを次々と創設していった。各地での西武百貨店、西友の出店計画のなかで「どこに文化施設が入るのか?」と担当者は問われた。グループの文化発信装置はひと頃、主なものだけでも全国に40近く点在していた。

美術展を開催し、芝居を上演し、映画を製作上映する。重要なのは、その装置内で文化を完結させるだけでなく、本業と有機的に連関させた《セゾン文化》を構築し、発信・展開したことだった。

「君たちは一銭も稼いではいない。他の部門が稼いだカネを使っているのだ」――文化事業に携わっていた私たちは、堤さんにいつもそう叱咤されて返す言葉もなかった。一銭も稼がないけれど、《文化的な稼ぎ》をあげなければならなかった。すでに世間的評価を得ている文化をとりこんで、実績をあげることではなく、それらと差別化した新たな文化を発信することを念頭に置いた。総帥としての堤さんは、常に切実に身を切る思いを重ねていたはずである。

1988年に京都で「日仏文化サミット」が開催された。その前後から企業の文化活動・文化支援の風が、この国に強く吹きはじめた。企業メセナ協議会が発足したのは2年後。その中心メンバーのひとりとしても、堤さんは国内外で力強いリーダーぶりを発揮しつづけた。企業による経済的見返りを期待しない文化支援を、本気で積極的に持続する経営トップのなかでも、当時の資生堂・福原義春社長、サントリー・佐治敬三社長、それに堤清二の三氏を、私は企業文化推進役の中軸の三本柱と信頼していた。堤さんをはじめ他の二氏にお会いする機会が稀にあると、失礼を顧みずそのことを申しあげた。

堤さんは辻井喬として、「実業家の他、詩人・作家として多くの著作があり……」とよく紹介される。その通りだけれど、十分ではない。実業家であって、個人的に文化人として活躍する人は少なくない。しかし、堤さんはその範囲にとどまる人ではなかった。経済人として、セゾン文化財団理事長として、将来ある若い芸術家を長年にわたって本気で支援し、内外の文化芸術の振興・交流に、個人を超えた覚悟で力を尽くしてこられた。その功績はきわめて大きい。若い芸術文化(人)が真底好きな人だったし、理解も広く深かった。

毒とユーモアをからめたあの笑い声はもう聞かれない。寂しいかぎりである。やるべき仕事のプランは、まだまだおありの様子だったし、必要とされる人だった。突出した《尽力》そのものの生涯に対し、今は衷心から「ありがとうございました」と申しあげるばかりだ。(合掌)

表現者としての経営者を悼む

山崎正和
YAMAZAKI Masakazu
評論家・劇作家、セゾン文化財団評議員

それは畳敷きの部屋だったから、小料理屋の二階ででもあっただろうか。初対面の堤清二氏は現れるなり、並んでいる私と安部公房氏の前に異様なほど深々と頭を下げられた。新しく渋谷にパルコを開店し、その最上階に劇場を併設するので、私たちにそのこけら落とし公演の新作戯曲を書いて欲しいというのが、堤氏のご依頼であった。

もちろん喜んで承知したものの、当時すでに詩人辻井喬として知られ、文士仲間のように思われた堤氏のその慇懃すぎる態度には、私はいささかとまどったことを覚えている。二時間余り酒食をともにしながら、目の前にいたのは終始、経営者でありメセナ活動家である堤清二であって、文学者辻井喬ではなかった、裏返せば印象に残ったのは、事業にあたって同業者意識や狎れあいを許さない、この人の凛然たる姿勢であった。

その後、数十年にわたるおつきあいのなかで、堤氏の私にたいする態度はまったく変わることがなかった。パルコ劇場でたびたび拙作を上演したときも、後に銀座のセゾン劇場で『世阿弥』の再演をしたときも、成功を喜んでくれたのはあくまで劇場オーナーとしての堤氏だった。作家辻井喬が拙作の内容について文学的な批評をするという場面はなかったし、結果として私の側も、辻井喬の作品について語ることをさけがちになった。

これは残念な事実だが、同時に堤氏の倫理的な潔癖さを物語る恰好の逸話でもあるだろう。日本有数のメセナ活動家たる経営者として、潜在的に庇護の対象となる作家にたいしては、この人はことさら冷静な距離を置こうと決意していたにちがいない。私もまたこの潜在的なパトロンに向かっては、まちがっても阿諛(あゆ)と誤解される発言は控えてきたから、この推測はたぶん正しいはずである。

それにしても堤清二氏は辻井喬と同じく、その経営の内容においても表現者であった。パルコにしても無印良品にしても、あるいは銀座セゾン劇場やホテル西洋銀座にしても、この人の送り出す商品はすべてイメージであり、時代感覚であり文化であった。晩年、しだいに軸足を経営から文筆に移しつつあった堤氏だが、その心境にはさして大きな段差も捻れもなかったと思われる。近年では私との関係においてももはやパトロネージの可能性はなくなり、ようやくともに文学を深く語りあえる環境が生まれたやさき、氏の訃報に接したことは痛恨の極みというほかない。

堤清二さんへの追悼

リチャード・ラニエ
Richard S. LANIER
アジアン・カルチュラル・カウンシル理事長

40年前、著名なる舞台美術家の朝倉摂さんが私を堤清二さんに引き合わせてくれました。当時堤さんは西武百貨店の代表取締役社長であり、私は現在アジアン・カルチュラル・カウンシル（ACC）として知られる財団の前身、ジョン・D.ロックフェラー三世が設立したJDR三世基金のジュニア・スタッフでした。私はそれまでに――そして未だに――企業人、詩人、小説家、そしてフィランソロピストと多岐にわたって活躍する、彼ほどユニークかつ素晴らしい人に出会ったことがありませんでした!

1970年代初頭ニューヨークにて、堤さんはJDR三世基金のディレクターだったポーター・マックレーを尋ね、同氏の計らいでリンカーン・センターやニューヨーク近代美術館、そしてラ・ママ実験劇場を含むいくつかの劇場や文化施設の代表者に会われました。ラ・ママでは、同劇場の創立者であり、プロデューサー兼演出家のエレン・スチュアートと出会い、すぐに二人は大親友となりました。ニューヨーク滞在で堤さんが収集した情報は、渋谷のパルコ劇場のデザインに大いに活用され、この体験は、日本とアメリカとの間の、より有意義な文化交流の促進に対する彼の興味を駆り立てました。

芸術交流を通じて日米両国をより近づけようとする目標の一環で、現在アジアの4都市にあるACC初の海外拠点となった東京事務所の設立に向けて、堤さんは1983年に基本財産となる画期的な寄附をセゾングループからACCに対して出捐されました。当時その寄附は、日本の企業体からアメリカの非営利団体による芸術プログラムに対する最大のものでした。堤さんのリーダーシップのおかげで、ACCは今も引き続きセゾン文化財団から支援を受け、同財団とはACC東京事務所を通じて緊密に活動を行っています。

30年間にわたりACCの理事として献身的に活動した堤さんは、日本とアジアにおけるACCの活動の発展と成熟において重要な役割を果たされました。堤さんのイニシアチブにより、ACCは約1,400万ドルの助成金とそれに付随するサービスを、広範な交流事業や活動に携わる1,000名以上の日米の芸術家や研究者、文化関係の専門家に対して提供してきました。

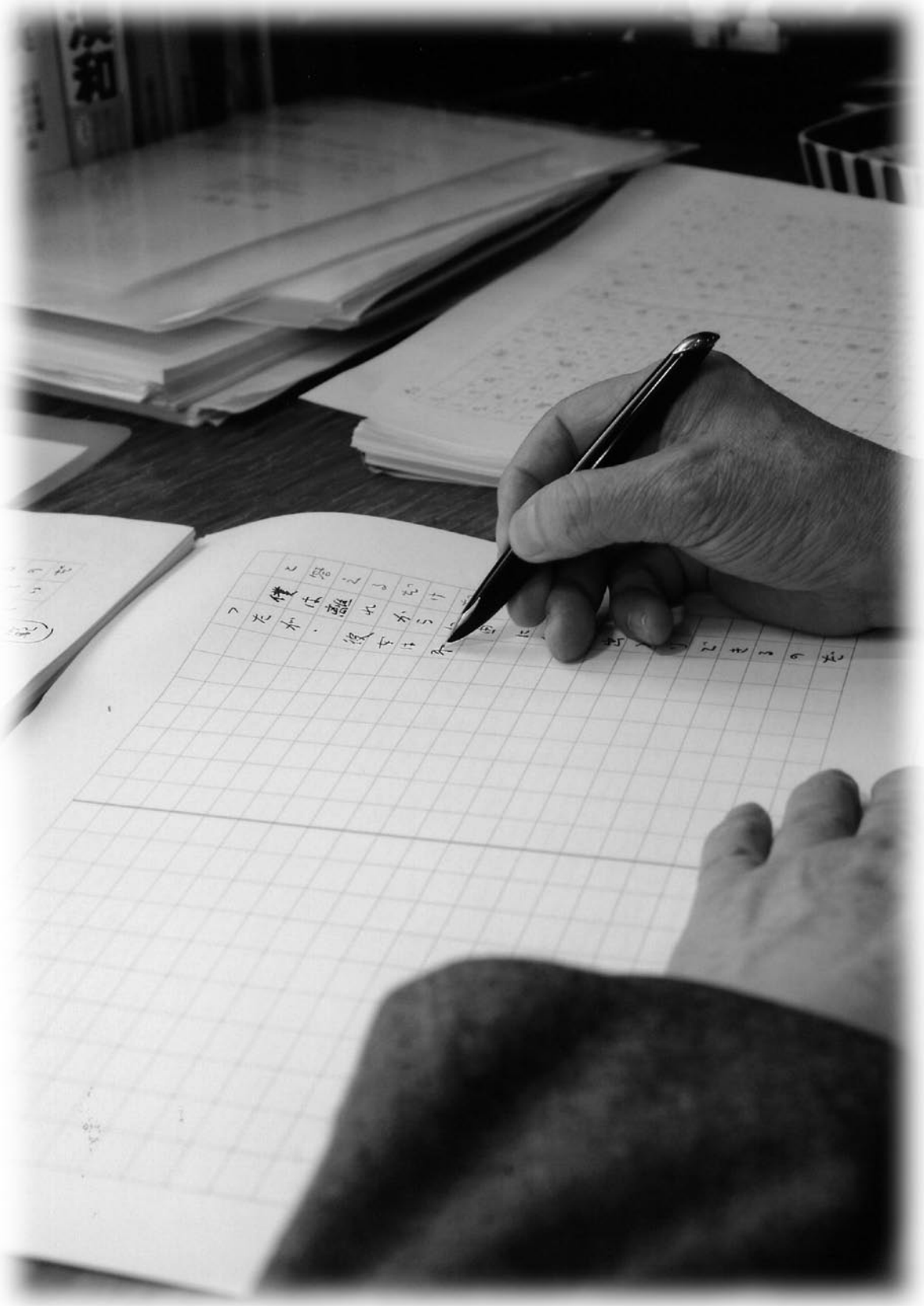
これまでの特筆すべきフィランソロピー活動における寛大さと、ロックフェラー家の寄附活動の伝統を見事に体現したことに対して、堤さんは2012年に東京でACCのブランシェット・H.ロックフェラー賞を受賞されました。この賞は、ACCの初代会長を務め、アジアの芸術と文化に対する情熱をジョン・D.ロックフェラーと共有した同氏の夫人を記念して設立されました。

ビジネスマンとして、堤さんは芸術への支援には二通りの意味で利益があることを理解していました。文化と商業を組み合わせることは芸術にとっても良いことであり、かつビジネスにとっても良いのです。企業グループの代表を務めながら、作家としての創造性を保ち続けた事実は、彼の限りないエネルギーと知的な洞察力、そして満ち溢れた才能を示す大きな証拠です。彼はセゾングループの舵取りとして、経済的に最も挑戦的な時代にグループをリードしました。また、多数の受賞歴のある詩人・作家の辻井喬として、最高の文学的な財産を残しました。そしてセゾン文化財団の創設者として、さらに数多くの重要な文化的活動を支援した人物として、国際的なフィランソロピーの世界では並ぶもののない存在です。

芸術には境界線を超越する力があり、各人の背景や価値観または視点に関わらず、より高いレベルで相互に理解し尊重する心を育む共通の場を提供するものであるという彼の想いを分かち合うわれわれにとって、芸術家であり、パトロンであり、また同志と友人としての堤清二さんは、これからも私たちを励まし続けることでしょう。

（翻訳：編集部）

1983年10月、ニューヨークのアジアン・カルチュラル・カウンシル（ACC）に対してセゾングループが寄附した際の記念式典にて。ACC初代会長のブランシェット・H・ロックフェラー氏（右）と現理事長のリチャード・ラニエ氏（左）と。photo: Osamu Honda



公益財団法人セゾン文化財団の新理事長、副理事長が選出されました。

去る1月27日(月)に開催されました当財団の理事会におきまして、新理事長に伊東勇(元・株式会社パルコ取締役兼代表執行役会長)が、また副理事長に堤麻子(一般財団法人セゾン現代美術館評議員)が選出され、着任いたしました。

公益財団法人セゾン文化財団の2014年度の助成対象者が決定しました。

去る1月27日(月)に開催されました当財団の理事会におきまして、2014年度の助成対象者が決まりました。
助成件数は50件、総額6,100万円です。詳細につきましては当財団のウェブサイトをご覧ください。
http://www.saison.or.jp/
当財団では次のプログラムおよび自主事業を行っております。

I. 芸術家への直接支援
セゾン・フェロー(現代演劇・舞踊界での活躍が期待される劇作家、演出家、または振付家の創造活動全般を複数年にわたって支援)
サバティカル(芸術家に休暇・充電の機会を提供)

II. パートナーシップ・プログラム
創造環境整備(舞台芸術界のシステム改善、人材育成、情報交流事業など、芸術創造を支える環境を支援)
国際プロジェクト支援(発展的に展開する国際的な協働事業を継続支援)

III. レジデンス・イン・森下スタジオ
ヴィジティング・フェロー(森下スタジオを拠点に、海外の芸術家やアーツ・マネジャーが行う日本の現代演劇・舞踊の状況や背景、魅力等のリサーチ活動を支援)

viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第66号 [追悼 堤清二理事長]
2014年2月25日発行
編集人: 片山正夫
発行所: 公益財団法人セゾン文化財団
〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-1 東貨ビル8F
Tel: 03-3535-5566 Fax: 03-3535-5565
URL: http://www.saison.or.jp
E-mail: foundation@saison.or.jp
●次回発行予定: 2014年5月末 ●本ニュースレターをご希望の方は送料(90円)実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。